

留学記（1）

小嶋祥三

「心理学ワールド」という小冊子にアメリカの国立保健研究所 NIH で 1978-1980 年に研究した時のことを書いた。それを機会にアメリカでの生活を思い出すようになった。この『残照記』にも時々顔を出す。「心理学ワールド」の記述と重なることがあるかもしれないが、思い出したことを書いてみる。

わたしが若い頃、在職していた京都大学・霊長類研究所では、海外で研究するのはごく自然のことだった。わたしより下の世代では、この傾向が減少したように思う。若い人たちの意識が変わったのかもしれないし、日本の研究のレベルが上がり海外へ行く必要性が減ったのかもしれない。また、インターネットの普及も関係しているのだろう。わたしが若い頃の主な通信手段は手紙の航空便だった。

当時、わたしはサルの前頭前野の神経生理学的な研究やそれに関連した行動研究を行っていたが、サルの聴覚と音声の研究へ方向転換しようと考えていた。紆余曲折があったが、留学先は米国の国立保健研究所 National Institutes of Health, NIH の National Institute of Child Health and Human Development, NICHD にある D. Symmes と J.D. Newman の研究室になった。かれらはリスザルの音声の行動実験や、神経生理学的な実験を行っていた。半年の予定で、経費は京都大学 70 周年記念事業からだしてもらった。ただし、その後は同じ National Institute of Mental Health, NIMH の Patricia S. Goldman のところで 1 年半滞在することになっていた。ただし、こちらは前頭葉の研究である。

留学の準備は特にしていなかったように思う。英語を読むのはともかく、話したり、書いたりするのは苦手だった。内向きで無口、外部世界に現実感を持ちにくかったので、マトモな準備などしようがなかった。単身でアメリカに渡り、その後に妻、息子呼び寄せの手もあったのだろうが、そのようなことは考えたこともなく、親子 3 人で行った。

霊長研のある犬山から実家のある東京へ向かった。同僚の松沢哲郎と大学院生の小島哲也の両氏がわざわざ名古屋駅まで送ってくれた。新幹線に乗った時、なぜかかれらはバンザイをしたので、照れくさく、恥ずかしかった。1978 年 3 月 1 日に日本を発った。成田空港はまだできておらず、羽田からニューヨークには日本航空で行き、ニューヨークでブラニフ航空に乗り換えてワシントン DC に着いた。ナショナル空港には Newman 氏が迎えに来てくれた。かれはフォルクスワーゲンのマイクロバスに乗っていた。対向車に同じマイクロバスがあると、手を上げて挨拶し「兄弟だ」と言っていた。日本車の対米輸出が盛んになり始めた頃だったのか、トヨタ車などを見かけた。

NIH はわたしのような訪問研究者に慣れているのか、短期間ホームステイできる付近の家庭を世話してくれた。この辺りは Newman 氏に助けてもらったと思う。それは Sutermeister 夫妻の家だった。このお宅には 1 週間強滞在した。この間は雪が降り寒かつ

たが、こちらは高揚していたのか、それどころではなかった。銀行 **Bank of Bethesda** で口座を作ったり、家や車を探したり、動き回っていた。このお宅に滞在している時に経験して今でも覚えていることがある。まずは、ひどい時差ぼけ **jet lag**。真夜中にすっかり目覚め、親子3人眼がランランとしていた。窓から美しい赤い鳥（カーディナルだったと思う）が雪の枝に止まっているのを見た。骨のある肉については『食べ物の記憶』に書いた。ご夫妻がわたしたち家族にチョコレートを一箱プレゼントしてくれた。わたしたちは日本人の慎み深さで一旦断ったが、これはよくないと思い直し、後でありがたくいただいた。わたしたち家族を残して、ご夫妻は外出することがあった。別にそんなことはしなかったが、家の中をうろつくことは可能だった。そういうことを気にしないのが不思議だった。雪道を **NIH** に向かって歩いていたら、後ろから来た車が停まって乗せてくれた。**Newman** がどうやって来たのかと聞いたので、英語で説明するのが面倒だったから、ヒッチハイクと短く答えておいた。

住むところは何軒か当たったが、最終的に **NIH** のある **Maryland** 州 **Bethesda** 市の西にある **Rockville** 市の **Congressional Lane** のアパートになった（今も残っており、**Google Earth** で見るができる）。確か7階建てだったが、その5階の隅の部屋だった。片方は外なので、開放的で眺めは良かった。隣は **Woodmont Country Club** というゴルフ場だった。大きな居間と台所、ベッドルームが2つ、バスとトイレがついていた。家賃の額は忘れてしまった。わたしが **Kyoto** を日本風に発音したところ、アパートのオフィスのおばさんに「キョト」と直されてしまった。家具つきの部屋ではないので、当然何もなくて、ガランとしていた。ただ、台所用品は備え付けのものがあつた。洗濯機は同じ階のコイン・ランドリーを利用した。この地域には無闇矢鱈と **NIH** の日本人研究者がおり、便利だったが、言葉を含め、アメリカの生活に馴染むといった面では好ましくなかったかもしれない。絨毯を購入し、帰国する日本人研究者から仕事机その他を買い取るなどして、徐々に住居を整えていった。この点については、別に述べる。

自動車は日本人の研究者から中古品を購入した。オリーブ色の **Ford** の **Pinto** という2000cc位の車だった。確か800ドルだったと記憶している（当時は1ドル250円程度だった）。日本と異なり、自動車は右側通行なので、初めは少し戸惑った。日本で取得した国際運転免許証を持っていたが、米国の免許証が必要だった。交通法規の勉強を真面目にやり、試験は問題なくパスした。困ったのは、免許証の身長を **feet, inches** で、体重は **pounds** で記入しなければいけないことだった。うまく換算できなかつたので、並んでいた隣のオッサンにどれくらいだろうかと訊ねた。オッサンは身を引いて私を眺めまわし、適当な値を言ってくれたので、それを書き込んだ。自動車といえばガソリンだが、初めは **self-service** であることを知らず、スタンドの人に入れてもらった。

電話をつけるのも一苦勞だった。設置を電話で申し込んだが、相手の言うことが理解できず、仕方なくバスに乗り、電話局まで行った。対面して話せば意思疎通は可能だった。

申し込んで 4 日ほどで、電話がついた。家具に関しては、新しいものを買うよりは、中古品を探した。ドラッグ・ストアで地域の新聞を売っており、ガレージ・セール of 広告がでていた。地図を頼りに、広告を出しているお宅に伺い、必要なものを買求めた。あまり値切ったりしなかったのて、いいお客さんだったと思う。初めこそ Newman 氏のマイクロバスのお世話になったが、その後は、購入した車が屋根にもものをくくりつけられるようになっていたので、ソファーなど何でも載せて運んだ。6 月には我が家に Newman 夫妻や Sutermeister 夫妻をおよびして食事をしているので、5 月中にはすっかりと整ったと思われる。